

六条院の栄華のかたち

— 初音巻をよむ —

一、問題の所在

玉鬘十帖は、光源氏と玉鬘の恋物語を描く巻であると同時に、太政大臣となり、六条院を造営した光源氏の栄華を語る巻でもある。栄華を語るに際して、実子と偽って引き取った娘への恋物語、というねじ曲がった物語を語ること自体、『源氏物語』の独特な世界観を端的に示すものであるが、本論文では、六条院の栄華のシンボルである玉鬘との恋物語が本格的に開始する以前、初音巻の六条院の正月を検討する。栄華の初春はどう叙述され、どんな含意があるのか、これ以前の物語の組み込みに着目しながら考え、六条院を考える一助としたい。

二、初音巻と紫の上のうた

太政大臣として特段の朝儀に参加しない光源氏の正月は、二日

今井久代

の夜に臨時客があるのみ、その前に六条院の女性たちのもとを巡る場面が続く。ここで焦点化されるのは紫の上と明石の君であり、まず初めに光源氏と紫の上との間に、次の歌が交わされる。

a うす氷とけぬる池の鏡には世にたくひなきかげぞならべる

(源氏)

くもりなき池の鏡によるづ世をすむべきかげぞ

しるく見えける

(紫の上)

この光源氏と紫の上の歌は、六条院の初春最初の歌であり、六条院の栄華を端的に象る位置にある。ここで鏡が題材となったのは、直前の中将の君の主人夫婦を祝する言、「かねてぞ見ゆるなどこぞ、鏡の影にも語らひはべれ。私の祈りはいかでか」による。これは、正月行事菌固めの祝歌「近江のや鏡の山を立てたればかねてぞ見ゆる君が千歳は」(古今・神遊び)をふまえる言で、「鏡の影」には正月にふさわしい祝意が加わっている。また、

b 身はかくてさすらへぬとも君があたり去らぬ鏡の

かけは離れじ

(光源氏)

別れても影だにとまるものならば鏡を見ても

なぐさめてまし

(紫の上)

のように、光源氏と紫の上は須磨の別れに際し「鏡の影」に離れたい思いを託した(須磨一七三)。その二人のいまの幸せを「鏡の影」に「見る」ことは、この幸福を須磨の別れを乗り越えた結果として祝するにも、格好の表現であるといえる。だが一方で、先の祝歌を引いた中将の君の、紫の上の新枕以前からの光源氏付女房で、召人であるという立場は、かの祝言に含みを読ませずにはおかない。新全集の頭注も言うように、鏡に映る自らを見て愛されぬ身をかねてから知る、といった恨み言にも読み得るのである。この次に続くのが、明石姫君を紫の上に預けた忍従の人、明石の君のエピソードなのだから、いっそうに曇り無い幸福のかたわらの、抑圧を余儀なくされた思いが照らし返されよう。

また、中将の君の言などの「(ふつうの)鏡」から「池水の鏡」への変容も着目される。六条院という新たな邸での初春を祝する場面であるため、邸の景が題材となったのだろうが、「邸」は本来主を超えて伝領されていくものであるゆえに、「邸」に関わって歌うとき、主の行方、その歴史という主題が浮かび上がりがち

である。ここで『源氏物語』などに繰り返されてきた、庭の池水を通して邸の主人について歌う歌を一瞥しよう。

c かけ広みたのみし松や枯れにけん下葉散りゆく

年の暮れかな

(兵部卿宮)

さえわたる池の鏡のさやけきに見なれし影を見ぬぞ悲しき

(光源氏)

年暮れて岩井の水もこほりとぢ見し人影のあせもゆくかな

(王命婦)

桐壺院が亡くなり、藤壺宮が実家の三条宮に移り住む前に、この人氣がなくなっていく仙洞御所の未来を思つての唱和である(賢木九九一〇〇)。光源氏の歌は、大和物語の七二段、亭子院に住んでいた敦慶親王の死後、親王をしのんで平兼盛の詠んだ

池はなほ昔ながらの鏡にて影見し君がなきぞかなしき

を下敷きとする。この光源氏詠、兼盛詠ともに、かつて池の鏡に映っていた主の影の行方を求め、面影をしのぶもので、いま池水に映る主を歌うものではない。これに對して、

d 住みなれし人はかへりてたどれども

清水は宿のあるじ顔なる

(明石の尼君)

いさらゐははやくのことも忘れじを

もとのあるじや面かはりせる

(源氏)

松風卷の大堰に移り住んだ明石尼君と光源氏の贈答（松風四一三）は、遣水が見た邸の主人について歌う。この大堰山荘は、明石尼君の祖父中務宮のもので（中務宮、大堰の地から、『紫明抄』『河海抄』以来、兼明親王が准拠とされる）、明石尼君が伝領した。久しぶりに住む私に比べて遣水の方が主人顔でいる、と歌う尼君に対して、遣水は昔を忘れるはずもなし、もとの主が面変わりしているのではありませんか、と源氏が応える贈答である。「面変わり」は、直接は出家姿へと変わったことをいうが、「もとの主」と言語化することで、もとの主中務宮から孫娘へと面変わりした歌とも解せる含みが生じている。これに似るのが、

e なれこそは岩もあるあるじ見し人のゆくへは知るや

宿の真清水

（夕霧）

亡き人のかげだに見えずつれなくて

心をやるるいさらゐの水

（雲井雁）

自分たちを愛し育んだ祖母大宮の三条宮（故左大臣邸）を新居とし、移り住んだ夕霧雲井雁夫妻の歌である（藤裏葉四五六―七七）。夕霧と雲井雁の場合、いまこの邸の主である自分たちの姿は歌わず、かつて映っていた「見し人」「亡き人」が映らぬ悲しみだけを歌い、言外にいまの主である幸福な自分たちの水影を意識させている。このほか主と池水を歌うものに、「水の面にしづく花の色さやか

にも君がみかけの思ほゆるかな」^{（古今・小野篁^{注1}）}「なき人の影だに見えぬ遣水のそこは涙にながしてぞこし」^{（後撰・伊勢）}もある。総体として和歌表現における「池水」と「主」は、過去の邸の主の行方に連想が及ぶもので、現在の喜びだけを歌う初音巻の光源氏と紫の上の贈答歌は異端らしい。池水の影は「過去」の主を連想させる表現であり、翻って邸の伝領とは無縁な女主、紫の上の弧愁を炙り出しているのだらう。須磨の別れに象徴される光源氏との愛はあっても、いまの邸のかつての主、つまり父祖からの伝領から疎外された紫の上の現在が、抉られてしまうのである。

三、松風の里と六条院の春

女主人として周囲に忍従を強いる存在でありつつ、同時に頼る肉親のない不安定さを抱える紫の上。この二重性は、明石の君のエピソードによっても補完されている。そもそも初音巻の明石の君の話は、薄雲巻での子別れの松の贈答歌を明確に下敷きに（元且が初子の小松引きの日でもあるという舞台設定のため、我が子からの初めての和歌「初音」に、子別れの贈答歌の歌ことは「松」が無理なく重ねられた）、姫君を紫の上に渡し、紫の上を頂点とする六条院の秩序の下で忍従を生きる明石の君の苦悩を象っている。その一方で明石の君の居所は、「唐の綺のこととしき縁さしたる褥」「をかしげなる琴」「侍従

をくゆらかして物ごとにしめたるに、裏被香の香紛へる」「筋変り、ゆゑある書きざま（ノ手習）」のある空間である。贅沢な褥と香は明石一族の富を偲ばせ、多種の香を取り合わせてのかぐわしさや、通常のくずしと異なりながら「ゆゑ」を思わせる仮名など、明石の君の小手先でない、深く本格的な教養の蓄積を示唆している。ことに「琴」は、須磨明石巻を振り返りつつ、明石の君に蓄積された祖父大臣以来の明石一族の由緒と教養を窺わせる品であつた。

すなわち、流謫の無聊を慰める光源氏の琴の音色に誘われて訪れた明石入道が、琵琶と箏を取り寄せて自ら琵琶を弾き、源氏に箏を勧め、ついでに娘の明石の君が「延喜の御手より弾き伝へたること三代」の入道から習つて「自然にかの前大王の御手に通ひて」の箏の名手であり、琵琶も「をさをさとどこほることなうなつかしき手など筋こと」であると喧伝したことで、源氏は明石の君に興味をもつた（明石二四〇・四）。別れに際して源氏のかの琴を弾き、明石の君も心動かされて箏を合わせるが、その音色は当代の名手藤壺宮の「いまめかしうあなめでた」の箏にくらべても「あくまで弾き澄まし、心にくくねたき音ぞまされる」もので、感動した源氏は再会までの形見にと、流謫の地まで携行した愛琴を明石の君に残した（明石二六五・七）。そもそも箏は女が慕わ

しくしどけなく弾くのが良いと源氏が語つた（明石二四二）ために、明石入道は娘の「箏」を語つたが、少女巻では内大臣（頭中将）が「いとこそ上手と聞きはべれ。物の上手の後にははべれど、いかにでさしも弾きすぐれけん」（少女三四）と、明石の君を女の「琵琶」の名手の第一にあげている。明石の君が受けた音楽教育は、箏だけに留まらない弾き物一般の、本格的な相伝だったのだから。琴、箏、琵琶は大陸に由来する楽器であり、きちんとした奏法の相伝が必要で、由緒と教養を物語る楽器であるが、源氏はその明石の君の相伝の音色に関心を持ち、感動したわけである。光源氏の流謫の日々に「琴」があつたのは「君子左琴」思想の反映だが、その琴の名手光源氏も一目置く弾き物の名手が明石の君というわけで、醍醐天皇由来の相伝者だという。この明石の君は、松風巻では源氏の形見の「琴」もごく当たり前に弾き、その音色は斎宮女御の和歌のごとく「松風はしたなく響き合ひたり」（松風四〇八）。「松風」の巻名は、この時の「身をかへてひとりかへれる山里に聞きしに似たる松風ぞ吹く（明石尼君）」「ふる里に見し世の友を恋ひわびてさへづることを誰かわくらん（明石の君）」の贈答歌によるものである。松を渡る風は、大堰で故郷の浦風を思う明石の君たちの寂寥を象徴しつつ、明石の君が弾く琴の音色（ひいては光源氏の須磨明石の日々につながる音色）に共鳴し、鳴り響いた。女

の嗜みとして光源氏から筆を習ったのみで本格的な相伝は受けず、「琴」を弾くことのない紫の上とは違って、明石君は相伝を受け、源氏のように「琴」を弾く。明石で育った受領の女というのみならず、一族に蓄積された相伝・伝領の継承者でもあることを、巻名「松風」の場面は示唆している。

初音巻の明石の君の挿話は、初子の日ならではの小松の表現が濃厚に引き込む、薄雲巻の哀切な子別れの松を下敷きにして、明石の君の忍従の日々を鮮やかに象っている。ただしかの松風の日々では、忍従に加えて、明石巻でも描かれた一流の「ゆゑよし」の人としての明石の君、「琴」を弾き邸を受け継ぐ王統らしい明石の君の姿もあったのである。そして初音巻では、別れの小松の贈答歌以外にも、松風の日々と響き合う叙述がちりばめられ、忍従とは違う明石の君のあり方が浮かび上っている。aの池の鏡の影の贈答歌から、「松風巻」「いさらゐの水」の贈答歌を想起すれば、中務宮ら皇族の血を引く明石の君の家筋が思い起こされる。冬の町の「をかしげなる琴」は光源氏との音楽の記憶にまつわり、他にも舶来品をはじめとする豊かな物品に取り囲まれている。紫の上を頂点とする六条院のなかで、明石の君は忍従を余儀なくされるが、一方で中務宮より伝来の山荘、醍醐天皇より相伝の音楽など、通常の受領の娘とは異なる高貴な血筋を有してい

る。松風巻の記憶が呼び起こすこうした明石の君の姿は、翻って六条院の女主たる紫の上が、頂点に立ちながらもろく危うい女主でもあることを、照らし出しているのである。^{注4}

四、二条東院の住人たち

その1 蓬生巻と閑屋巻から

臨時客のあとは、二条東院に残った女を源氏が訪れる話になる。二条東院には常陸宮の姫君（未摘花）と故常陸介の後妻で右衛門佐の姉の尼（空蟬）がいた。帚木三帖、および未摘花巻に登場したこの二人は、藤壺立后、桐壺帝の讓位と崩御、右大臣一族の専横と光源氏の謫居と復権といった紅葉賀から落標巻の物語には全く姿を見せない、いわゆる玉鬘系の人物である。蓬生・閑屋巻が語られずに物語から消えても不思議ではない二人に、蓬生・閑屋でいかなる側面が加えられて、二条東院の住人になるのだろうか。

そもそも二条東院は、紫の上に次ぐ妻である、花散里や明石の君らを迎えるために造営された。このうち后がねの明石姫君の生母という明確な立場をもつ明石の君は別として、花散里や五節は、「見しあたり情過ぐしたまはぬ」「憎げなく、我も人も情をかはしつづ過ぐしたまふ」（花散里巻）のほかない情で結ばれた女たちで、「かやうの際に、筑紫の五節がらうたげなりしやは」花

散里（一五五）と、五節と並列された中川の女や、中川の女と同様にふと思い起こして立ち寄った妹が門の女（若紫巻）もこの類であった。^{注5}さて、花散里巻やそれに続く須磨、明石、濤標巻の叙述においては、なぜ花散里が光源氏の心を捉えたのか、今ひとつわかりにくい。中川の女と違って信じて待ち続けていた誠実さの称揚とも見えるが、「思さぬことにもあらざる」思いに、ふと思ひ立つて立ち寄る源氏を「あいなしと思ふ人は、とにかくに変わるもことわりの世の性」（花散里一五八）というのだから、中川の女の心が一概に否定されているわけでもない。最終的には紫の上に次ぐ妻となる花散里との結びつきを、なるほどこうしたゆゑ、真情として描くところに、『源氏物語』独特の人間観が見て取れるが、それはさておき、蓬生巻でもう一度末摘花を本筋に関わらせるにあたり、末摘花巻の醜怪で烏詩な姿を一時棚上げにしても、花散里巻の構図と同じ探訪譚で物語を締めくくったことに留意しよう。すなわち、『花散里邸』に行く途中の初夏のたたずまいに源氏は過去を思い出し、思い出の邸に立ち寄る。その結果、中川の女とは違って、待ち続けた心の誠を発見し、感動するという展開が描かれているのである。

中川の女の話は、妹が門の女の挿話とも似ている分、変換というほどでもない、久しぶりに来た気まぐれな男を自らあきらめ

た女の話とも読み得るし、その分、対比される花散里の「心長さ」の印象もあいまいになっている。しかしながら詳しい困窮ぶりや、その困窮にも関わらず羽振りの良い太宰大貳の北の方の誘いを断り続けた常陸宮姫君（末摘花）の話では、志操堅固に誇りを守る心長さこそが印象深く、光源氏に発見されて救われる大団円には感動せずにいられない。蓬生巻が語られることで、花散里と源氏を結ぶ絆のはかないかけがえなさの印象は薄まるものの、代わりに誠実な心長さが前景化していくのである。蓬生巻では常陸宮邸と花散里邸は「あざやかにいまめかしうなどはなやぎたまはぬ所にて、御目移しこよなからぬ」と同類だと描かれ、蓬生巻末の語りによれば二人はほぼ同時期に二条東院に迎え取られたという。衣配りでも、「夏の御方」（花散里・「かの西の対」）（玉鬘）の次、「明石の御方」の前に「末摘花」の名があがる（玉鬘巻）。思えば末摘花は、花散里と同様に、過去には勢威のあった由緒正しい家の生まれであり、それは仏道修行「筋の精錬な僧」（蓬生巻では禪師、初音巻では醍醐寺の阿闍梨）の兄弟、かぐわしい香、舶来の草製品、^{注7}琴の琴を弾く（末摘花巻）などからも窺える。そして少女巻になるととにかく花散里の醜貌が繰り返されるようになり、醜女という点でも末摘花と花散里が重ねられていくのであった。^{注8}

続いて関屋巻である。関屋巻では、さりげなく語られている受

領層、とりわけ空蟬の弟右衛門佐（小君）が興味深い。すなわち、空蟬の夫の前常陸介は、伊予介も歴任、まずまずの羽振りだが、権勢家の側近にまでは至らない受領である。息子は左大臣家に方違え先を提供するなど近侍し、左大臣家の浮沈に伴って紀伊守や河内守に任せられ、ほぼ父と同格の受領であろうか。もう一人の息子（右近將監）は光源氏の須磨行きに同行し、一時は苦境にあったが、源氏の復権に伴って叙爵を受け（松風巻）、将来は明るい。空蟬はこの受領一家の後妻であったが、夫の死後、継子に対して主張できる相続はさほどなく（鎌倉時代の阿仏尼の類の「後家」の実権はない）、頼りにできるのは、実弟の小君だけであった。小君は光源氏のお蔭を被つて十七、八歳までに叙爵（関屋三六二、二十四、五歳ですでに従五位上相当の右衛門佐であり、これは『うつほ』『落窪』の衛門佐の年齢や出自に照らすに、受領層というより上達部の子弟の待遇に近い。光源氏に引き立てられて恵まれた官歴をたどりつつ、凋落する光源氏（桐壺院崩御の翌春、早くも「除目のころなど、……御門のわたり、所なく立ちこみたりし馬、車うすらぎて、宿直物の袋をささ見えす」であった）を見てそつと遠ざかった小君は、蓬生巻の志操堅固な常陸宮姫君といかにも対照的である。そして光源氏と空蟬のやりとりの成立は、二人の思いもさることながら、結局この小君が仲立つ可否かによるのであった。伊予に下るに際して空

蟬が歌を贈ったのも、小君が日頃源氏のもとに参っていたからで（夕顔巻）、小君が常陸に下向してしまうと、空蟬は源氏の須磨行きに心を痛めても歌を贈ることもできなかった。関屋巻で贈答成ったのも小君の取り持ちによる。

逢坂の関で邂逅した際、源氏からは短い言づてだけで歌はなかったこともあり、「行くと来とせきとめがたき涙をや絶えぬ清水と人は見るらむ　え知りたまはじかしと思ふに、いとかひなし」〔関屋三六二〕と空蟬は一人心に思うのみであった。思い続けたきたこの思いが大切なものであればあるほど相手には伝わるまいという諦観は、五節の「復権なつた源氏に対し　あいなく人知れぬもの思ひさめぬる心地」〔明石二七五〕や、朝顔姫君の「もの思ひ知るさまに見えたてまつるとて、おしなべての世の人の、めできこゆる列にや思ひなされむ、かつは軽々しき心のほども見知りたまひぬべく」〔朝顔四八七〕にも窺え、この物語を貫くひとつの思惟と評せよう。そもそも空蟬は「げになべてにやはと、思ひ出できこえぬにはあらねど、をかしきさまを見えたてまつりても何にかはなるべき」〔帯木巻〕と考えるような、拒む女として登場した。大切に思う相手に己の真情は伝わり得ないという思惟は、他ならぬ空蟬の身分差にこだわる思惟に端を発し、身分差の問題にとどまらず、相手の優位を理解し自分の現実を見つめる理知をもつ女性の

普遍的な思惟として、繰り返されてきたのである。ゆえに空蟬

は、復権し栄華のさなかの光源氏に心を伝える愚を、むろん理解する女性であつたろう。にも関わらず二人が歌を交わしたのは、

右衛門佐（小君）の仲立ちのために他ならない。桐壺院崩御の翌年に早くも源氏から遠ざかった身を、「などですこしも世に従ふ心をつかひけん」と悔いる右衛門佐にとって、久しぶりの上京の途上、逢坂の関で偶然光源氏一行に遭遇したところ、特別に召し寄せられたのは望外の幸運であつた。その日は予定通り一行と都に入らざるを得なかつたが、せつかくの絆を逃すまいと右衛門左は源氏の帰洛を見計らつて御迎えに参り、「一日まかり過ぎしかしこまりなど」申し上げて、「親しき家人」のように振る舞つたが、幸い源氏も不快の念を「色にも出だしたまはず」、右衛門佐の出迎えを許した。「なほ親しき家人の中には数へたまへり」（関屋三六二）の機微を、そのように読み解こう。都に入つたところ、源氏は右衛門佐を再び召し寄せ、空蟬への和歌を託す。「今は思し忘れぬべきことを、心長くもおはするかな」（関屋三六二）と冷めた目で主人の色恋を批評しながら、それを実現すべく手足となつて働くさまは、夕顔巻での惟光にも重なる、気の利いた受領層のしたたかな認識と献身である。

わくらばに行きあふみちを頼みしもなほかひなしや

しほならぬ海

（光源氏）

逢坂の関やいかなる関なれば繁きなげきの中をわくらん

（空蟬）

右衛門佐が取り持った答歌は、近江国の歌枕の連想から切り返す、作法通りの歌と見えるが、詣でた石山の近江の海（琵琶湖）を歌う源氏に対し、空蟬は邂逅した逢坂の関に執して、関の連想から「繁きなげきの中をわく」と続けている。歌の景を共有せず、自らの「嘆き」を見つめるのに執した歌であり、抑えきれぬ未練をおのずと明かしてしまつてもいるが、それでも「人は見るらむ え知りたまはじかし」の核心は詠出していない。この二首は空蟬の胸底の諦めと未練を端的に示すが、理性を振り切つて未練の零れた歌を返してしまつた姿は、ひとえに取り持ちの右衛門佐の思惑を意味している。空蟬の矜持は受領の思惑に左右されてしまつている。

五、二条東院の住人たち

その2 末摘花と空蟬が物語るもの

玉鬘巻になると、末摘花のみならず空蟬も二条東院に居ることが明かされる。五節に同じ弧愁を抱えていた空蟬が、五節の拒んだ二条東院に迎えられていたという、唐突にも見える展開だが、

閑屋巻を想起すれば、読むべきは右衛門佐の思惑である。^{注10}なるほど空蟬に源氏が執着する以前の右衛門佐は、伊予介や紀伊守の子ですら殿上童として上流貴紳に馴染むなか（帚木九五、十二、三歳になっても童殿上でできなかった 帚木九六。そうした右衛門佐にとって源氏と空蟬の間に通う感情は、なるほど自分を貴族社会につなぐ千載一遇の伝手だろ。その伝手を恒久的に活かすには、自邸に姉を引き取るより、光源氏の邸に身を寄せる姉尼を後見する方が都合が良い。兄を世話して醜態をさらす末摘花と対照的な、雅やかな空蟬の出家生活は、空蟬を個人的に後見する存在を物語る。かくして空蟬は、『無名草子』にも謗られる、趣味は良くとも屈辱的な出家生活を送ることになった。

結局光源氏の栄華は二条院・二条東院でなく、四方四季の六条院が舞台となり、六条院には紫の上のほか、花散里と明石の君が迎え入れられた。花散里巻以降の紫の上系の巻々で語られた二条東院構想は、そのまま六条院構想に拡大解消した感がある。一方蓬生閑屋の二巻は、帚木三帖や末摘花巻でそのまま消えることもできた末摘花と空蟬を再び本筋と絡めるもので、つまるところ六条院造営後の二条東院住人を用意する巻である。光源氏の栄華の叙述にあたり、六条院体制下に二条東院を据え直す必然は奈辺にあったのか。まず指摘できるのが、花散里巻に蓬生巻末が重ねら

れ、官家の誇りをまもって愚直に待ち続けた末摘花と花散里がなることで、過去の名族生まれの花散里の心深く長く穏やかな理想性が鮮明になり、また源氏と添い遂げる女性性は、末摘花も含めて心深く志操堅固な心の美しい女に印象づけられたことである。この点、同じ烏澹者でも末摘花は源典侍と峻別される。六条院に迎え取られる理想の次妻、ひいては光源氏の妻たちすべてが、世の勢威の行く末におもねることのない、古風なくらい誠実で心長い人物と印象づけられる。ただし少女巻で醜貌という要素も加わると、末摘花と重なる花散里の姿には、理想の次妻というのに留まらない部分も加わっている。それでも少女巻での花散里の醜貌ならば、醜女を重んじ続ける光源氏の理想性の強調ともみえるのだが、「夏の御方」「末摘花」「明石の御方」と並ぶ末摘花が醜い烏澹者として活き活きと活躍するようになると、後述のように醜女を重んずる心長さという段階を踏み越えた読みが喚起される。また、豊明節会の日よりずっと源氏を思い続けたからこそ復権成った源氏に距離を感じ、源氏の熱望にも関わらずひっそり遠ざかった五節^{注11}の一方で、同類の思慮を抱えながら空蟬が二条東院の住人となった展開に照らすとき、皮肉なまなざしに行き着かざるを得ない。光源氏と添うかどうかは、結局は経済力の問題、生きるための打算と伝手に左右されるのではないか。源氏を思う真情

を清いまま抱き続けられるかどうかは、経済的な問題いかんによる。五節には豊かな肉親がいるし、朝顔姫君の結婚拒否は源氏の理解ある後援あつてのことなのである。真情は、結局財力や地位とひとつづきに読み替えられる。

蓬生・閨屋巻を経て、末摘花と空蟬が二条東院の住人となる流れは、光源氏の妻たちの「心深く長い」さまを強調しながらも、一方でそれを批評する視座をももたらす。ことに心深く聡明で、心長い空蟬の思いが、世におもねる右衛門佐の打算と出世に読み替えられて二条東院に繋がれた現実は衝撃的で、しかも大きく見れば紫の上たちも無縁ではない。紫の上が六条院の頂点にあるのは光源氏の愛が生活の後援でもあるからであり、心深く長い聡明さを有することは、花散里や明石の君や空蟬のように出処進退をわきまえて忍従を生きること、その忍従の対価として人も羨む六条院の栄華があるのだ。讃仰される者が負うものをあきらかにする、聡明な空蟬の有り様の傍らで、末摘花だけはまったく愚鈍であるのだが、そこにあるのはいつそある種のすがすがしさである。世事に疎い末摘花の兄は、居ても全く生活の助けにならず、むしろ末摘花の暮らしを変わず寒々しく恥ずかしいものに留めるばかり。それを取り繕う才覚もない末摘花の頓珍漢もあつて、華やかな正月早々に、みつともなく涙を垂らす赤鼻を目撃した光源氏は、

呆れ返るほかない。賢く目端の利いた弟をもち、出家しても好ましい生活ぶりて源氏を感じさせた空蟬といかにも対照的である。しかし、呆れ返つての辛辣な皮肉にも動じず、惨めな生活をさらして気にもとめない末摘花には、源氏も倉を開けて細々と生活万端を支援するほがなく、末摘花の生活は幸福に持続し、翌春の玉鬘の裳着には、勘違いな贈り物を贈る余裕ぶりである。

からころも君が心のつらければたもとはかくぞ

そぼちつつのみ

(末摘花 二九)

きてみればうらみられけり唐衣かへしやりてん袖をぬらして

(玉鬘 一三七)

我が身こそうらみられけれ唐衣君がたもとなれずと思へば

(行幸 三一五)

三首並べてみれば、家伝の歌学書での学びの成果か、「唐衣」をめぐる縁語と掛詞の共鳴は徐々に練達している(末摘花巻の拙さから、一首の焦点が「かへす」の玉鬘巻、「なる」の行幸巻へと上達)。むろん一昔前の修辞で同じモチーフの繰り返し、祝いの場に合わぬ恨み歌(行幸巻)等の良識的判断に照らせばとんでもない和歌であるが、末摘花としては進歩があり、本人も大満足なのだろう。良識など意にも介さない頓珍漢ゆえに、良識に縛られて鬱屈を抱える空蟬とは違って、末摘花はあけすけに自らを主張していて揺るぎないの

である。

実は玉鬘十帖では、「幼き御心にまかせてくだしく」の明石姫君（初音巻）、「あいだちなき御言ども」の花散里（蜚巻^{注12}）、「あやしく老いゆく」大宮（行幸巻）など、理性的で教養深い成人女性ならばおよそ詠まない歌が詠まれる場面が繰り返される。末摘花はその極めつけと言えようが、こうした褒められない言動は、逆に賢明な女性たちが良識に自縄自縛となつて口に出せない思い、例えば親娘の絆なり、源氏への執着なり、血縁の主張なり（玉鬘の着裳は公式には光源氏の娘として行われ、大宮以外の内大臣家は着裳の祝いを贈れずにいる）のあけすけな主張ともなっているのが興味深い。嗤われる者の末摘花は、末摘花を嗤う者の（良識）（常識）の底浅さや残酷さを逆に炙り出している。嗤われない空蟬たちよりも嗤われる末摘花の方が幸せなのだと、初春の二条東院は物語っているようである。

四、おわりに

男性官人の栄華を端的に物語るには、官人が多数参集する公的な行事の描写がもつとも効果的であるだろう。しかしながらこうした一般的な公的行事の描写をなるべく抑え、例えば胡蝶巻の中旬季の御読経にしても宮中でなく六条院を舞台とし、しかも前日

の春秋争いの決着のついでの開催のように描くあたりに、物語が造型しようとする光源氏の栄華のかたちが窺える。中旬季の御読経こそが「日の御装ひにかへたまふ」行事であり、春秋争いの「親王たち、上達部たちあまた」にとどまらず「殿上人なども残るなく参る」のだから、本来はより公的で盛大な行事であることは言うまでもない。しかし物語は中旬季の御読経よりも春秋争いこそを丁寧に描き、しかも春秋争いでは、女方である秋好中宮付き女房たちの視点に寄り添って描くのである。女方の催しにも参加を許されたかのような描きようで、二日連続で招かれた者は、一日目の春秋争いを優先したという（障りあるはまかでなどもしたまふ）。「限り」のない、気ままに趣向をこらせる内輪の女方の催しにこそ、六条院の栄華があり、人を集めるといふ描き方は、いかにも『源氏物語』らしい栄華の描き方である。

さらに六条院の初春の造形にあたつても、行事ではなく女性たちの動向に筆が割かれ、紫の上、明石の君、末摘花、空蟬など、女と光源氏との交流が続く。たかが男女の痴情を取り上げつつ、その叙述を統制するのは人間の本質をえぐる眼である。色恋話とみえて、これまでの物語や和歌表現などに照らし合わせるとき、世を生きる抑圧と忍従、真情と物欲の絡まりが浮かび上がる。それを描ける人物を選び、初子の元旦という場を設定して、行事と

無縁の色恋その他の人間関係を語りながら、現在の美麗な榮華の別の面を、過去に照応し過去を引き込む表現の狭間から窺わせる。そこにこそ『源氏物語』の見つめるものがあるのだろう。

※源氏物語の引用と頁は小学館新編全集による。和歌は国歌大観により、私に表記を改めている。

注

注1 厳密にはこの和歌の場合は水に映る花の姿を歌い、亡き帝への思いを重ねている。

注2 拙稿「『源氏物語』彈物四種の女楽が描くもの―「跡ある」琴と「跡なき」和琴をめぐる―」（『東京女子大学日本文学百八号』二〇一二年三月）。四種の彈物のうち、大陸由来で奏法があり相伝を基とする琴・箏・琵琶と、奏法もなく簡便で当人のセンスが重要な和琴という性格の違いがある。『奏箏相承血脉』のような相伝血脉書は中世になって重んじられるもので、『源氏物語』の頃はさほど重要な話題でもないらしく、物語内で相伝や名手についてさほど記述があるわけではないが、明石の君関連の箇所だけ史実上の人物とも絡めて突出して詳しいことに留意したい。音楽の相伝は、明石の君という人物の造型に際して重視されている。

注3 小林久子「源氏物語の音楽理念」〔『源氏物語研究』第四号、一九七六

年十二月）。上原作和『光源氏物語 學芸史―右書左琴の思想』（翰林書房、二〇〇六年）

注4 同じ人物が、他を抑圧する強者でありまた運命の変転に翻弄される悲運のひとつでもある不思議は、王朝人なじみの『長恨歌』と『上陽白髮人』の狭間からも読み取れる。

注5 拙稿「花散里の語るもの」（『源氏物語 煌めくことばの世界』翰林書房、二〇一四年刊行予定）で詳しく論じた。

注6 坂本共展「源氏と末摘花」（『源氏物語作中人物論集』勉誠社、一九九三年）

注7 河添房江「末摘花と唐物―唐櫛篋・秘色・黒貂の皮衣」（『人物で読む源氏物語 末摘花』勉誠出版、二〇〇五年）など。

注8 蓬生巻によれば、松風巻のころ末摘花は二条東院に入ったはずだが、夕露の後見が二条東院で行われる少女巻でも、全く登場しない。蓬生巻が後補と評されるゆえんであるが、後補かはさておき、蓬生巻は玉鬘巻と呼応しつつ、少女巻で加えられた醜女という部分も含め、花散里を末摘花に重ね合わせる流れを形作っているのを重視したい。

注9 「うつは」連澄は二十七歳左衛門佐（左大臣正頼四男）、『落窪』景政は中納言三男で出世頭・左衛門佐（年齢不明）、藤原宣孝（紫式部の夫、父中納言）は四十代で右衛門佐である。小君はうつはの連澄をしのぐ昇進の早さと造形されており、光源氏の愛顧を推察させるものだが、関屋巻には「なほ親しき家人」とも叙される。小君自身の性根と言動により、以後中納言の子である羽振り良い受領として生きるのだろう。

注10 拙稿「空蟬と小君」(『人物で読む源氏物語 葵上・空蟬』勉誠出版、

二〇〇五年)

注11 五節は少女巻に最後に登場する。「かけていへば今日のこととぞ思は

ゆる日かげの霜の袖にとけしも」は、往事を偲ぶ心情に加え、下の句の景で光源氏に照らされてあつてなく恋に墜ちた若き日の五節の情と、溶けて袖の涙となった結末とを暗示しており、切なく美しい歌である。これだけの思いを抱えて二条東院入りを拒んだ五節の機微を、「うち思しけるままのあはれをえ忍びたまはぬばかりのをかしうおほゆるもはかなしや」の語り手の評言が抉る。文としては傍線部分「をかしさを、をかしう」とあるべきだろうが、重なり合う二者の「をかし」の懸隔が逆に推察される。少女巻には末摘花も空蟬も登場しないが、花散里の醜貌も明かされるなど、二条東院を組み込んだの六条院体制が見据えられた巻であることは疑いない。

注12

「あいだちなき御言ども」は、厳密には光源氏の答歌の後の評言で、花散里の贈歌に続くのは「おほどかに聞こえゝあはれと思したり」と、あたかも好ましい歌であるかのような地の文である。だが、源氏の答歌自体には、中年の自らを「若駒」と歌うことを除けば、「あいだちなき」表現はない。花散里自身の意識、それを耳にした光源氏の意識では、孤閨を素直に受容する慎ましい歌でありつつも、意図を超えて不穏な感情が抉られた歌でもあることを、「あいだちなき御言ども」が抉っていると考ええる。

(いまい ひさよ 本学教授)

